

3月11日を「国民鎮魂の日」に

生きて在る意味に頭を垂れる

東北地方のどこかの町であったか、会社の仕事で上京していたある男性が帰宅の途中で津波に遭遇したものの辛くも生き延び、引き波が収まった頃を見計らい自宅に戻ったところ、家は完全に消失し、父母、妻、2人の子供のいずれもが行方知れず、以来、夜に目を凝らして能う限りを尽くしたのだが、影さえない。テレビに映り出された男性の顔は憔悴し切った、目は虚空を泳いでいた。

テレビのショットでみせられただけで、この男性のその後のことは私にはまったくわからない。ただ想像するだけである。

どうしてあの時に家族と一緒にいてやれなかったのかと詮なき自責の念に胸を掻きむしられ、家族ともども自分も引き波にさらわれていたうごんなによかったことかと悔悛を繰り返す。

避難所暮らしの数日のうちに、同じような酷薄の運命にある人々が少なからぬことに気づかされ、みずから生きていまここにいることの意味に次第に頭を垂れるよ

うになる。天を憐む一瞬さえ与えられずに息絶えた家族、さらには血縁につながる人々、彼らが生を紡いできたこの地のために自分のエネルギーを吐き出さねば、身の証が立てられない。

そう考えてこの男性は、冷徹な現実を記憶から振り払うように、死者の発見や被災者の救援、瓦礫の除去に懸命の努力を始めたのではない。政府や自治体の救援がなせぬに遅く拙いのか、時に不満が頭をかすめるが、そんな恨みは言葉にはならない。

危機管理の司令塔たる首相官邸や政府指導部の対応に強い憤懣をぶつけているのは、被災地から遠く、放射能被曝の恐れもない他地域に住まう人々ばかりである。震災の原因の追及も不徹底なままに、地震と津波、原発事故が「想定外」のものであったのか否か、そもそもこの事態は「天災」なのか「人災」なのかといった類の、

正論



拓殖大学学長 渡辺 利夫

誰でも思いつくような幼い議論の横行である。

被災者の心に寄り添わぬ言説

一方に、想定外の天災だといって管理責任を免かれた人々がいる。他方に、想定内の人災だといいつてて権力の交代を求める人々がいる。働かざる被災者の心に寄り添う言説はいかにも細かい。われわれは、太平洋プレート、北米プレート、フィリピンプレート、ユーラシアプレートの4つが織りなす巨大地震源の「巣窟」、

という日本の大動脈が東日本大震災級のマグニチュードで襲われれば、いかに壮大で精細な防災計画を施したところで、人知を易々と超える惨劇が各所で発生することは避けられない。

合理的思考に則って防災のありようを徹底的に追究することが重要でないわけではない。しかし、同時に、防ぎようもない厄事がこの世の中には存在するのだといつしなやかな論議の構えを私どもはもたねばならない。

民族がらえて次の世代に

人間は安寧な自然の中で生成したのではない。私どもは過酷な自然の中に連れて生まれ来た者なのである。天変地異によって、万が一、民族の半分が消滅してしまつたとしても、残りの半分は自然の冷酷な打ちを怨みながら、しかし生き存えて次の世代に日本という存在を継いでいかなければならない。

苦境に陥ったときほど生きて在ることをより鮮やかに確認し、生命力を漲らせて民族の連綿たるを証さねばならない。強靱なる民族

とはそういう存在なのである。日露戦争の戦端が開かれたときの明治大帝の、広く知られた御製にこうある。

しきしまの大和心をしよはことある時ぞあらはれにけり

個々の生命体は必ず滅する。しかし死せる者の肉体と精神は遺伝子を通じて次の世代に再生し、永遠なる生命が継承されていく。その個々の生命体の集合がすなわち民族である。こうした人間の営為はいかにして可能か。苦難の中で喘ぐ生者に生命力を発揚させるものは何か。

死者への深い鎮魂である。死せる者があって初めてみずから生きていまここにいる。合理的思考のみをもって天変地異に立ち向かうというのはたまたの傲慢である。冒頭に掲げた男性が血縁に連なる者への哀悼を深くして再生にいたることを祈る。

3月11日を、民族の永遠なることを祈念する「国民鎮魂の日」として制定するよう提言したい。(わたなべ としお)